

The Reminiscence of Exellia NG+1

二千年前の君から

作成レギュレーション

Lap-“FINAL” END-1 (TReXLap2-21) と同レギュである。

基本概要（新規／継続）

- ・ 経験点：133500 / 145000 点
- ・ 資金：207000 / 231000G
- ・ 名誉点：1500 / 1800 点
- ・ 成長回数：227 回
- ・ レベル制限：13
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上
- ・ ステータスリミット：各項目ボーナス 13 まで

各種制限

- ・ ヴァグランツ、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0 / 2.5 標準流派入門禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬の成長回数が 10 以上のとき、60%以上の偏重割り振りの禁止

動画用メモ

宙準星の巫女／セレネ

立ち絵等は、これまでの「宙準星の巫女」との変化なし。

ボイスについては差別化の観点から変更。

蒼天編に至るためのキーキャラクター（ミドガルズオルムボジ）。

召喚士ジーン

立ち絵はアビスリンカー装備（染色不可）フルの女性。エルフ。

????? / アドヴェント（聖アドヴェント）

すべての元凶。

導入

最後の薪の王、エクセリア。彼女が世界に与えた影響は未知数だ。だが…《律》は今も尚、己の愉悦のため、世界の破滅を狙っている。

世界に住まう人々は、律の駒。

そこに記された物語は、律が記した運命。

しかし彼女は、その物語を書き換えて見せた。

それによって起こる災禍は、未だ計り知れず。

運命に刃向かった者に対する呪詛は、静かに、しかし確実に、世界を蝕んでいた。

冒険者ギルド《暗魂の暁》、ギルド本部『隠れ家』——

追想の物語は終わり、新たな時代が始まろうとしていた。ある世界なら、この新時代をこう呼ぶのだろう。『第七星暦』と——

第七星暦のはじまり

神城まどかとの決戦から、3週間。君達は各々が己の意志で活動していた。

とはいえやることらしいことはなく、鍛錬か惰眠を貪るかぐらいだったのだが。

そこへ、蘆田が来訪した。

(※GMメモ：RP待機)

蘆田

「エクセリアはいるか？」

君達がそれに対して受け答えをしようとするが…その瞬間、ガッタンゴロゴロ、と表現するのが正しいのかさえ怪しい騒音と共に、ぼろぼろになったエクセリアが私室から出てくる。

エクセリア

「すまない…、こんなズタボロで」

蘆田

「装いの話はいいい。一体何があったんだ？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアの目が露骨に泳いでいた。説明らしい説明ができないのだろうか？

エクセリア

「…なんにもないのに、躓いてずっこけた」

(※GMメモ：BGM 停止
かつ、RP 待機)

え？とおもうのは当たり前だ。

彼女は、通常の…「可視光」による視界ではなく、「物の斯く在るべしを定めるもの」を捉え、分析し、その結果を投影して視界を確保している。だから、躓くなんてことは、本来あり得ないと言ってもいい。

が…事実としてずっこけている。つまりどういうことなのか？

(※GMメモ：RP 待機)

エクセリア

「うっ…」

——考えられる可能性は2つ。ひとつは、単純にエクセリアが「存在定義を視る眼」を起動できていなかった可能性。

そしてもう一つは…

(※GMメモ：RP 待機)

——幽霊が出たか、だろう。何がともあれ君達は、『新たな旅路』の始まりに、エクセリアの私室の調査をすることになる。

光当たるところに闇あり

一方——

魚座のモノリスの主

「まどかが死に、“黒の剣士”は敗走。アンドリアスとアルトゥールは生体反応こそ確認できるが、相変わらず姿を隠さん。天秤、お前は思う？」

天秤座のモノリスの主

「…何もクソもあるか。俺達の目的は変わらねえ。

役目を放棄した牡牛座、水瓶座、第十四の座を無視して、俺達の世界を救うだけだ。

そのために、この世界にある『祝福』——すなわち、剣の加護をすべて奪い去る必要があるというわけだ」

中央に座する男——ジャック・ニコラス・トニトルスは、不服そうに言葉を紡ぐ。

J・ニコラス

「ジェラルド。俺がこんな顔をする理由は分かるな？」

天秤座のモノリスの主

「…ああ。俺達の行動に、何かしらの制約が掛かっていることに気付くのは容易だ」

J・ニコラス

「今の今まで、我々に与していた『律の意志』が、ここにきて我らに反旗を翻している。どうやら、我らの世界を救うことは、奴のシナリオにはないらしい。だが…こういう事案について知識を持つ、双子座の者はどうした？」

誰も、参加しているモノリスの主は答えない。

アンドレア

「…奴は、我々への協力を拒んでいた。祝福無き者と、『天使い』…その目的は相反し、手を取ることはできない…、と。真なる世界を取り戻したい彼らの考えと、我々の目的は合わないと言っていた。

だが、彼もまた、第十四の座のあの者との友情を優先した…。故に欠番だ」

蛇遣い座のモノリスの主——アンドレアの発言を聞き、ニコラスはため息をつく。

J・ニコラス

「どいつもこいつも…、友情だ絆だと言って、私情ばかりを優先する…！

やはり、平伏させなければ…。真の王が誰なのかを…！」

？？？

「だったら、僕に頼めばいい」

憤怒を加速させるニコラスに応じるように、蟹座のモノリスが点灯する。

J・ニコラス

「黒の剣士…」

黒の剣士

「あの一撃で倒されたわけではないんだ。それに、彼らが封じている力…。それを使えば僕達も上回れる。負けた相手に負かされるという事実を突きつけてやれば、彼らだって祝福を渡すと思うよ？」

それは、悪魔の契約の提示のようにも見えた。普通ならば、余程追い詰められていなければ、そんな提案を受諾しないだろう。

だがここは、世界を蝕む『祝福無き者』のアジト。その提案は、首魁たるニコラスにとって、なによりもありがたい話だった。

J・ニコラス

「…プライム、か。いいだろう。次に攻め入るときは、それを十全に使うといい。俺は、第三帝国に戦争を急がせるとしよう」

悪意は、未だ踊り続ける…。

聖王の影身、セレネ

君達は、“なんやかんや”で、エクセリアの私室に初めて入った。整えられた本棚。しかし机の上には、大量の本が山積みされている。机のそばには、大型の魔動機式ディスプレイが設置されていた。

本のそばに置かれている紙には、魔動機と思われる機体の設計図などが描かれていた。

PC は各種判定を行う必要がある。

探索（スカウト観察）判定（本棚 1 / 2 / 3） 目標値：21 / 23 / 25

文献（セージ知識）判定（魔動機の設計図） 目標値：23

文明鑑定（セージ知識）判定（大型ディスプレイ） 目標値：25

探索判定（本棚 1）

君達は、本棚に気になる書物を見つけた。表題に「天界の王」と書かれている。

内容を調べる場合は、続けて文献判定（目標値：23）を行う必要がある。

> 文献判定（天界の王）

数多くの戦場で長きにわたり、敵勢力の実力ある兵たちを潰してきた絶対的英雄。

シラージ王国の世継ぎだったが、革命によって共和制に移行したために王権を継ぐことなく、また革命と同時にソルビア第三帝国に併合されたため、一兵卒として過ごしている。老年の兵士なのだが異常なまでに強い。

シラージ系の住民は、皆『天界の王』と呼んでいる。

…『幽霊探し』の目的に合うような内容のものではなさそう。

(※GMメモ：RP待機)

探索判定（本棚2）

君達は、本棚に気になる書物を見つけた。表題に「召喚獣の特性」と書かれている。

内容を調べる場合は、続けて文献判定（目標値：23）を行う必要がある。

>文献判定（召喚獣の特性）

召喚獣とは、この世で最も危険な存在達の総称だ。

人の身に降りるタイプの「支配者型」、祈りに応じて顕現し洗脳する「蛮神型」が有名だが、それらの最終的な到達点、その力の源は、空より現れし者の元の姿であるという。

しかし、それは言った。「あるときを境に、己の与り知らぬ召喚獣が現れた」と。

琥珀の召喚獣、コズミック・キューサー。氷珙の疑似蛮神、エデンコーラス・シヴァ。

溶岩の武神、ラーヴァナ。水害の雲神、ビスマルク。

これらを筆頭に、理屈が不明な召喚獣が増え続けているという。

…『幽霊探し』の目的に、若干合いそうな内容ではあったものの、これが正しいのかどうかは、実際に現物を見てみないことには分からない。

(※GMメモ：RP待機)

探索判定（本棚3）

君達は、本棚に気になる書物を見つけた。表題には何も書かれておらず、分厚く端が縫われていることが分かる。内容を調べる場合は、続けて文献判定（目標値：25）を行う必要がある。

>文献判定（愛用の紀行録）

私が行動不能になったときに備えて、この紀行録に取るべき事項を記しておく。

召喚獣コズミック・キューサーは、本来『召喚獣』の枠組みの内にある存在ではない。

それを踏まえれば、それを『分け御霊』として一時的に分離・記憶を共有する別存在としてその存在を確立することも可能だろう。

だがそれは最終手段だ。そのコントロールが戻ってくる保障はない。

…『幽霊探し』の目的に合いそうな内容だった。だが、最終手段であるこれを、戯れに彼女が取のだろうか？

(※GMメモ：RP待機)

文献判定（魔動機的设计図）

君達は、魔動機的设计図について解読を試みた。

ADF-11F Raven

ザインウェアのノースザインウェア・ドミナンサー社と、ヴァルマーレの空軍によって開発された第7世代戦闘機。

『ノーズユニット』と呼ばれる本体と、『ウイングユニット』と呼ばれる追加兵装で構成される。エフェメラル参道の一件で現れた機体は、ウイングユニット『RAW-F』を装備した格闘戦仕様であった。

…『幽霊探し』には関係なさそうだ。

(※GMメモ：RP待機)

文明鑑定判定（大型ディスプレイ）

大型の魔動機式ディスプレイのようだ。使われている部品からして、魔動機文明時代のものだと言想はできるが、それにしてはやけに異質だ。

物質のデータ化と呼ばれることが為されているのか、試しに木の棒を突っ込んで取り出すこともできた。

…興味深いが、『幽霊探し』には関係ないものだ。

(※GMメモ：RP待機)

< -- 各種判定ここまで -- >

君達が物色しているうちに、部屋にセリーヌが入ってくる。

セリーヌ

「お母さん、おなかすい…た…？」

彼女が目にしたのは…月白の皮膚装甲を持った、宙準星の竜の化身だった。

その姿は、あまりにもエクセリアに似ていたためか、セリーヌがフリーズしていた。

エクセリア

「…セリーヌ、どうした…？」

エクセリアがセリーヌに気付き、そこを見る。

そこには、かつて己が抑え込めきれず変容していたときの姿をそっくりそのまま映したものが、眠そうに座り込んでいた。

エクセリア

「…で…出た…。幽霊だ…！」

幼子でもないのに、エクセリアはとんでもない悲鳴を上げた。

単離の謎

それからしばらくして…。

目を覚ました「それ」は、君達を見るなり目を細める。

エクセリア

「…訊かなくても分かるが、敢えて訊かせてもらおう。お前…コズミック・キューサーか？まさかとは思うが…私を…」

エクセリアが言い淀む。あまり言いたくない内容なのは、君達でも容易に想像できるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

宙準星の巫女

「半分はそうだ。もう半分は、エクセリア…お前に溜まりまくった負の感情だ」

エメリーヌ

「英雄の影身…、ということかしら？なら、『影身さん』と呼んだほうがいいのかしら」

宙準星の巫女

「…いや、適当な名前と呼んでくれ。私を形容する名前はないからな」

(※GMメモ：RP待機)

宙準星の巫女は、月白から銀に至る髪を弄りながら、君達を見据える。

とはいえ、彼女自身、己を定義する名を持ち合わせておらず…故にこそ、君達には己につけられるその名を求めているようにも見えた。

エクセリア

「…なら、私が名を与えてもいいんだな？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアはそう言って、彼女に与えるべき名を思案する。

エクセリア

「セレネ。第十四の座が太陽を示すなら、その光を反射し地を照らす星の神と同列に扱ってもいいだろう。だが、謎だな。私の影身ならば、それに相応しい名を持ち合わせているものだと思うんだが」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・ 真に影身となる存在が死んだからでは？
- ・ もしかして、神城まどかが影身だったのかも

エクセリア

「…あいつが？」

よくわからないな、と言うような表情で君達を見る。

セレネ

「…お前すら分からないのか…」

エクセリア

「分からないものは、私でも分からない。今はその根源を探るのではなく、『なぜ影身がセレネとして単離したのか』を考えたほうがいいかもしれない…」

そのとき、君達は痛烈な目眩に見舞われる。

(※GMメモ：RP待機)

セレネ

「な、何だ！？急に倒れて…」

エメリーヌ

「まさか、過去視…！？」

目眩と頭痛に襲われ倒れる君達を、エクセリアはただ静観した。

星海の片隅で

?????

「聞いて…感じて…考えて…」

聞き慣れない女の声と共に、頭上に流星雨の幻影が現れる。

(※GMメモ：RP待機)

?????

「…始原の十四席に導かれし、光の戦士よ。

あなた達の心の輝きにより、闇は払われました…。

ですが、この星に根付く闇は…すべて失われたわけではありません。

深淵に潜む、闇の神。人の目では特定できぬ天の獄の先にいる、終焉を齎す権化…。

彼の者を消し去らない限り、世界から闇が消えることはないでしょう」

その声は、青いクリスタルを介して話しかけてくる。

…君達の視点では、彼女が何を言いたいのかさっぱり分からなかったのだが。

?????

「しかし…、光の意志はケルディオンに息吹きました。あなた達を種として…。

この光の芽は、いずれ大樹となり、この地を…この星を救うでしょう…」

そう言って、青いクリスタルは遠ざかっていく。

その直後に幻視したのは、先ほども見た流星雨の幻影…だけではない。

流星が地に落ち、その場所から青い結晶が生えていく。その場にいた命達を糧として、その結晶は成長し…やがて人型へと変化する。

それが…水平線の端から端まで、際限なく現れる。

???

「一切の希望を、捨てよ…。因果と輪廻に飲まれよ…」

その結晶の巨人達の群れの先…空を覆うように現れた、光り輝く異形の存在は、ただ腕を動かしただけで、世界のすべてを握りつぶせそうだった。

< -- 過去視ここまで -- >

過去視から醒めると、心配そうに君達を見るセレネと、目を閉じ、腕を組んで黙り込むエクセリアの姿を視認した。いつの間にか、エメリーヌは己の作業に戻ったようだ。

エクセリア

「…何を視た？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアの質問は、君達が見たおぞましいものの正体を探っているようだった。

彼女にとっても、「君達が見た景色」は興味のあるものであるようだ。

セレネ

「…探らないほうがいいのでは？」

エクセリア

「いいや。『見えた景色』次第では、彼らが『この旅路の結末』を見抜いているかもしれない。それが世界の終焉であるのならば、私が担う終滅の律に従い、それを未然に防がなければならない…。最も、私ひとりで背負うつもりはないが」

そう言って、君達を再び見るエクセリア。

エクセリア

「もう一度、訊かせてもらうよ。一体、何を視た？」

(※GMメモ：RP待機)

悪意のはじまり

(※GMメモ：BGM「哀しみのテーマ ～曉月～」)

君達は、見た景色を簡潔に、されど差し障りのないように話した。

エクセリアは、話の中で出てきた、空を覆う光の異形について心当たりがあったのか、それともまた別の理由か…戸惑いを隠しきれないような表情を浮かべていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…世界を救うには、無自覚に世界を滅ぼす害悪を裁かねばならない、か…」

リリアーナ

「我が主君…」

エクセリアは、目を瞑り熟考する。

セレネ

「心当たりが、あるのか…？」

エクセリア

「…大まかにな。だが、どうしてだろうな。その名に行き着こうとしたときに、まるで肉体が理解を拒むかのように頭痛がして、そこまでの思考を放棄、結果として出力がなくなってしまうんだ」

(※GMメモ：RP待機)

そうして、エクセリアが胸に手を当てた、そのときだった。
当てた右手に、徐に暖色系の光が灯った。

(※GMメモ：RP待機)

リリアーナ

「え、エクセリア…!？」

エクセリア

「炎の羽根…？これは…まさか…？」

エクセリアが右手に握ったものに気付くと、空間に声が響く。

??????

「ほんの僅かな手がかりから、私達の存在に行き着いたことをまずは賞賛しよう。
だが、君は知りすぎた。神たる私達を識った罰を与えよう」

その声と共に、エクセリアに雷が降り注ぐ。しかしエクセリアは、それに気付いて虚空を斬る。

??????

「ほう？これに反応できるとは流石だね。

流石は神の器、王たちの化身を討った宙準星竜のドミナントだ」

エクセリア

「お前は誰だ！どこにいる！隠れてないで出てこい！」

(※GMメモ：RP待機)

??????

「あいにく、そちらに顔を出すには因子が足りなくてね。自ら手を下したいところではあるが、まずはその世界の悪意のすべてを受けてもらうことにしよう」

声の主の気配が遠のいていく。

エクセリアは、知りたくもないことを知ったような、苦い表情で天を見ていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「そんなに…、そんなに、世界から命を奪うのが楽しいのか？そこまでの意味が、この世のどこにあると言うんだ…？」

君達は、エクセリアの発言を聞いて疑問符を浮かべることになるだろう。

そこへ、エメリーヌが訪れる。

エメリーヌ

「エクセリア、エクセリア！」

エクセリア

「どうした…？」

エメリーヌ

「未知の蛮神が顕現した…！」

未知の蛮神

君達は、流れでサロンに集められることになった。

エメリーヌ

「顕現した蛮神は…、炎と氷、雷の三属性を操る牛の姿をしているという…。それを召喚したのは、旧来派の召喚士らしい…」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「旧来派の召喚士が…？旧来派と言えど、蛮神は否定する立場だったはずだ。

それに連なるなら、一体どうして…？」

そう言って、エクセリアはしばし思考する。

エメリーヌ

「そこで、あなた達に手伝ってもらいたいことがあるの。

内容は単純、かの蛮神を討滅し、そのときに生じるエーテルの流れを捉えてほしい」

(※GMメモ：RP待機)

ベルリオーズ

「それなら、俺の鱗を加工した魔具を持っていけ。少なくともそれがあれば、魂を汚染されずに済むはずだ」

そう言って、ベルリオーズは装飾が施された、1枚の魔道具を渡してくる。

(※GMメモ：RP待機)

宝物鑑定判定 目標値：23

成功時、それが「護魂の霊鱗」と呼ばれるものであることが分かる。

ベルリオーズ

「いいな、熱くなりすぎるなよ？」

災禍の根源で

一方、ラカロテア樹林・炎の石塔――

そこに顕現した蛮神、クューサーに祈りを捧げ続ける信徒達を尻目に、召喚士は笑う。

召喚士ジーン

「これで良かったのですか、龍姫公？」

そう言って、召喚士、ジーンは背後でローブに身を包み、目元を隠した彼女に問いかける。龍姫公と呼ばれた彼女は、フードを外してジーンに答える。

龍姫公

「いくら結月が、斬った相手に『癒えぬ傷』を与える呪いの刀だとしても、それはあくまで『常人に対して』の効果。常人の枠に当てはまらない私には、一切合切関係ない。

私は闇喰竜のドミナントだ、弱った蛮神を喰らえば傷も癒える」

召喚士ジーン

「そのために、暗魂の英雄を使うと？あなた自身が直接手を出すのはダメなのですか？」

ジーンはもっともらしい疑問を龍姫公にぶつける。

龍姫公

「ああ、ダメだ。私が直接倒したら、折角癒える傷も癒えなくなる…。

確実に傷を癒やすためにも、奴らを使う」

その答えを聞いた彼女は、キューサーへのエーテル伝達を続ける。

それを見た龍姫公は、天に目を向けて言う。

龍姫公

「お前のせいで、この国は変わった。ゼーゲブレヒト…、お前を殺して、政体を戻す…。

首を洗って待っている、ゼーゲブレヒト…！」

龍姫公の双眸には、あまりにも暗い黒の光が灯っていた。

渦中をゆく

君達は、未知の蛮神が現れたという『ラカロテア樹林』の南端、炎の石塔があると言われる地域へと向かった。

アルテマ

『この気配…どんな存在を呼んだ…！？』

アルテマが戦慄したような言葉を言うと同時に、目の前に青い光が空中に生じる。

そこから現れたのは、無機的な生物だった。

????

「…… ……」

(※GMメモ：RP待機)

敵：クヤタン・ビットx6、クヤタン・サーバントx1

君達は謎の敵を倒した。しかしどういうわけだろうか、君達の後ろをついてきていたのか、セリーヌが君達に襲いかかろうとしていた蛮族の類を撃破していた。しかし片膝をついており、一目見ただけでも「げっそり」としていることは分かった。

(※GMメモ：台詞ごとに RP 待機)

セリーヌ

「皆の活躍がうらやましくて、ついてきちゃった…」

「リリアーナには止められたよ…。子供が行くべき場所じゃない、って言われて…。

でも、どうしても…己の目に焼き付けたかったんだ…」

「本当に危険なら、口笛を鳴らせば迎えが来るから、大丈夫だよ」

そう言って、身の丈に合わない双刀を構え直す、幼子のセリーヌ。しかし、持つ手は震えていて、かつ痛みを堪えているのも容易に察することができた。

(※GMメモ：台詞ごとに RP 待機)

セリーヌ

「怖くなんかない！それに…ここで立ち止まっていたら、きっと後で後悔する…。それだけは嫌だ！皆戦ってるのに、子供だからって理由でひとりだけ留守番は嫌だ！」

「…それに、この胸騒ぎ…。絶対に、よからぬことが起きてる気がして…。

これをお母さんに言っても信じてもらえなくて…」

「痛そう？そんなことないよ…！確かに、力を使った影響で疲れが出てるけど、その程度だもん！お母さんには言わないでよね！」

そう言って、セリーヌは君達についていくだろう。

セリーヌはレベル13の「巫覡」として扱いますが、攻撃を実行した場合、1dを振り、その出目が3以下だった場合、体力の使いすぎで膝をついてしまいます。膝をついた場合、その次の1ラウンドの間、セリーヌは一切の行動ができません。

先に進んでいくと、開けた空間がそこにあった。

冒険者としての勘か、君達はセリーヌに警戒を促すことになるだろう。

????

「さて…、力を示してもらいましょうか、暗魂の英雄御一行様…」

君達にその言葉が聞こえたかは定かではないが、そこに敵が現れる。

水晶色をした、顔のない巨人だろうか。とにかくそれが、君達の前に立ち塞がった。

敵：アンダーテイカー

3 ラウンド目の敵手番開始時に、「タナトス・スペクター」2 体と「タナトス・リッチ」3 体を追加出現させる。

君達は、現れた敵を殲滅した。

声の主を調べるため、危険感知判定をしてもよい。

危険感知判定 目標値：41 超

君達は声の主が誰なのか、気付いたかどうかは不明であるものの、その声の主は君達を観察して、関心を抱いていた。

????

「なるほど、これが光の戦士の力…」

君達は、現れる敵を倒しながら、進んでいくことになる。

その身にやどりし神

淵源へと向かうべく、君達はセリーヌと共に歩を進める。

セリーヌ

「…何だろう、さっきから胸騒ぎがする…」

(※GMメモ：RP 待機)

そのまま向かった先で、君達はよく分からないものを見つけることになる。赤い装束を身に纏った、いくらか破廉恥とも言えるべき装いの女性だ。君達は、その者を知っている。

そして本来、既にこの世にいるはずがないことも知っている。

PC への選択肢

- ・ 龍姫公…！？
- ・ お前は何者だ…！

龍姫公

「いやはや、まさか君達に会えるとは。偽りの平和を満喫できて満足かい？」

(※GM メモ：台詞ごとに RP 待機)

龍姫公

「そして、その幼子が…新たなドミナント？ああ、言わなくても分かるよ。そいつが一体どんな召喚獣を宿しているのか、私には手に取るように分かるから」

「ねえ…？レギンレイヴルのドミナント？」

そう言って、妖艶な笑みを浮かべた彼女は、「レギンレイヴルのドミナント」として指し示したそれ——セリーヌを指さし言う。

龍姫公

「まさか、聖シャルロッテ・クレア女大公が、己を召喚獣としているとは。ああ別に構わないよ。おかげで、そいつを喰えば、今召喚しているキューサーを含めて私の身体を癒やすに足るほどのエーテルは満ちるだろうよ」

セリーヌ

「何を言って…！」

そのとき、何かに苛まれるかのように…セリーヌが片膝をつく。

(※GM メモ：RP 待機)

龍姫公

「そう…。あなたは私にその身体ごと、その召喚獣の力を渡せばいい。

私の復讐のため…奴の愛娘を喰らって、奴を超えてやろう…」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、龍姫公を「敵」と見做し、武器を構えるだろう。

セリーヌ

「ううっ…、頭が…！ああっ…！うわああああッ！」

しかしその前に、セリーヌに異変が生じた。

(※GMメモ：BGM「ローズ・オブ・メイ ～黄金～」)

セリーヌ？

「…せっかく、皆が築き上げた平和を…戦乱の闇なき静寂を穢そうというのなら…」

口調が変わり、背後に光羽が顕現する。

レギンレイヴル

「この幼子に宿った召喚獣・レギンレイヴルとして…、そして“碧天の騎神”レギンレイヴル・シャルロッテ・クレア・ゼーゲブレヒト・アウェアとして…！世界を闇に染め上げる逆賊を討ち果たす！」

敵：龍姫公

この戦闘では、セリーヌに設定された制限が一時的に解除される形で、レギンレイヴルが参戦します。

勝利条件：龍姫公の HP を 30%以下にする。

敗北条件：セリーヌ（レギンレイヴル）の撃破。

龍姫公

「なんだ、この力は…？…本当に私の知る聖シャルロッテ・クレア女大公なのか…？」

不利を悟ってか、それとも解釈違いを起こしたのか…。

龍姫公は、この事実を受け止め、撤退していくだろう。

(※GMメモ：RP待機)

レギンレイヴル

「…それ個人が人格を持ったまま召喚獣になっているのが不思議か？

彼女に丸投げしたら、暴走状態になってしまう。だから、彼女が私に辿り着くまでは、私はこの身体に世話になるというわけだ」

セリーヌを器としてしか見ていないことを、その言葉から察することが可能だった。

(※GMメモ：RP待機)

君達がそれを追及すると、レギンレイヴルはため息をついて君達に向き直る。

レギンレイヴル

「私は、あくまでも『遙か昔にエクセリアに玉座を譲って逝った死人』だ。現世への介入は、そこまでするつもりはない。というか、したら気味が悪いだろう。特に、エクセリアとは顔を合わせたこともあるんだ、死人がこうして話しているのも馬鹿らしいというか」

そう言って、レギンレイヴルはセリーヌの魂の奥底へ沈んでいく。

セリーヌ

「はえ？私、何を…？」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、この後の戦いを予期して、セリーヌを隠れ家に逃がす必要があった。

口笛を鳴らせば、リリアーナなりベルリオーズなり…迎えが来るだろう。

口笛を鳴らせば、セリーヌは撤退し、以降の戦闘において、セリーヌの援護を受けることができなくなります。撤退させますか？

蛮神騒ぎの中心で

君達は、災禍の中心に辿り着いた。

そこには、牛の姿をした蛮神がいた。

召喚士ジーン

「ここまでの消耗ご苦労。早速だが死んでくれ。クューサーを消耗させた上で、これ以上の損害を、こちらに与えられては困るからな…！」

クューサーと、それを召喚した術者が、君達に牙を剥いた。

敵：クューサー、召喚士ジーン

君達は、敵を追い詰めた。

(※GMメモ：RP待機)

召喚士ジーン

「フフ…、目論み通りだよ。本当に助かるよ、暗魂の英雄御一行。
龍姫公！役目は果たした！クューサーを喰らえ！」

そう言って、召喚士は天に手を伸ばす。

月に紛れるように、漆黒の竜がクューサーに噛みつき、心核を抜き手で穿つ。

そして、君達を見て嘲笑うかのように吼えた後、漆黒の竜はどこかへと去って行った。

旅の果て

君達が帰還して、そして1日が経過した時の昼間。

エクセリアは、ジョセフによるセリーヌの容態に関する診断を待っていた。

ジョセフは彼女を触診で計り、ある結論に至る。

ジョセフ

「顕現したわけではないから、肉体に石化などの影響が及んでいるわけではないようだ。

だが、召喚獣の力を無理に使用するのはやめさせたほうがいい」

セリーヌ

「ちょっと、ジョセフおじさん…！」

エクセリア

「鍛え上げるだけなら、隠れ家の中でもできるから…。

そこら辺は安心してもらおうかな、セリーヌ？」

…その日、隠れ家にセリーヌの悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

(※GMメモ：RP待機)

…そして、その日の夕方。

エクセリア

「…で。なんで今になって出てきたんだ、先代殿？」

1万2000年、否…1億2000年という月日を経ても、得ることができなかった答え——『なぜ、2000年前に逝ったとされる、聖シャルロッテ・クレア女大公が、召喚獣としてセリーヌに宿ったのか』。

それを、レギンレイヴル当人から聞き出そうとした。

体力を使い果たし、寝床の上でぐっすり眠るセリーヌとは別に、立ち上る騎神の影が、君達も含めて見えていた。

レギンレイヴル

『龍姫公という閨が、今も尚蠢いていたこと。未だに、お前達がその身を滅ぼす原因に至っていないこと。雑であろうと、挙げだしたらキリがない。だがそれ以上に、挙げるべきことがある。

お前達が、最果ての聖王を頼りすぎていることだ』

(※GMメモ：RP待機)

最果ての聖王を『頼りすぎている』。

君達にとってそれは、一体どのような意味か、察することができるだろうが、それでも『それ』を理由に裁きの材料にするには足りないように感じただろう。

だが、レギンレイヴルが言うことは確かにそうだ。確かに君達は、その身を滅ぼすことが確約するそのタイミングで、無意識に頼りすぎていた。

(※GMメモ：RP待機)

レギンレイヴル

『そして何より…、『想いの力』を使いこなせていない…。

これは、きたる終末を退けるに当たって、最悪レベルの障壁となるだろう。

これを解決しない限り、君達に『終末の災厄』を退ける権利はない』

セレネ

「だが…、ハイデリンは『終末を退ける』とは、未だに言っていないらしいが？」

セレネの指摘を受けて、レギンレイヴルは沈黙した。

的を射ていたからだろうか？——否、そうではない。

《《その指摘を吟味しているのだ》》。

(※GMメモ：RP待機)

レギンレイヴル

『セレネ、とか言ったか…。あまりバカを言うなよ？『直接的に』今人にそんなことを言うものなら、星の理が逝かれる前に、終末騒ぎが起こることになるんだぞ？

そんな自殺行為、星の意志がすると思うか？』

レギンレイヴルは、その指摘に対してそのように答えた。

(※GMメモ：RP待機)

レギンレイヴル

『ひとつ、お前達に助言をするならば…星と命を巡る物語の終幕に至るまで、第二子を作るな。いいな？』

そう言って、レギンレイヴルはセリーヌの奥底に戻っていった。

報酬

経験点

このシナリオに経験点報酬はありません。

資金

- ・基本：5000G
- ・キューサー討滅：5000G
- ・エクセリアによる特別補填：5000G

名誉点

このシナリオに名誉点はありません。

成長回数

・基本：8回